大阪大学外国語学部英語専攻研究室

海外交流

畑　田　美　緒*

English Major in the School of Foreign Studies, Osaka University

Key Words：English Skills and Cultural Backgrounds

英語プラスα

昨今ますますグローバル化が進む社会の中で、国際語である英語の重要性を痛感する場面も増えて来ています。例えば社内での公用語を英語にする、と発表した日本企業のニュースは記憶に新しいことでしょう。その賛否はともかくとして、コミュニケーションのツールとしての英語を習得する必要性が身近に感じられる一方で、これからは英語だけでは不充分だ、英語プラスαを求めて行かなければ、という声も聞かれます。大阪大学外国語学部ではその「プラスα」として、英語以外の種々の外国語を専攻できるのですが、英語専攻では、英語が使用されている国々の文化的背景を専門的に学ぶ、ということを「プラスα」の要素として提供しています。

英語研究室と英語教育

英語専攻は外国語学部の中で最も学生数が多い専攻ですが（一学年の定員60名）、その教育を主として担う英語研究室も多彩なスタッフで構成されています。大阪外国語大学時代には、中・北欧講座（イギリス）とアメリカ講座に分かれていたのですが、大阪大学との統合後は教員の所属先がさらに多様化し、現在は合計17名（うちネイティブ3名）が言語文化研究科、世界言語研究センター、文学研究科、経済学研究科、国際公共政策研究科に分属しています。少々複雑ですが、所属先に関わらず全員が各自の専門領域を生かし、学生の学力向上のために努めているのです。初習外国語の場合とは異なり、英語は大学入学時点で各自がかなりの知識・能力を持っていることは言うまでもありません。中には２年生ですでにTOEIC満点を取った、という実力の持ち主もいる一方で、３年生進級要件であるTOEIC 730点をクリア出来ず、１年間余分に在学する人たちもいます。このように、大きなばらつきのある学生のどこに照準を当てて授業を行なうか、ということが私たちの最も頭を悩ませる問題の一つであるかもしれません。しかし、学生一人一人に入学時よりも高い英語力を身に付けてもらうと同時に、英語が話されている国々の文化についても理解を深め、専門的知識を学んでもらうことが英語スタッフの目標で、そのためには先に述べた教員の所属先が多岐に渡っていることも英語研究室の強みである、と言うことができるでしょう。

World English Forum

英語専攻では、大阪大学英米学会とEDU（English Department Union＝大阪大学外国語学部英語専攻、大阪外国語大学英語専攻語の卒業生の同窓会）との共催で、“World English Forum”としてさまざまなネイティブ・スピーカーの講師をお招きし、不定期にではありますが講演会を開催しています。昨年の春にはJapan Timesの大阪編集局次長がオバマ政権の現状と課題について話され、今年になってからは、新任のアイルランド人教員が言語を通して見たアイルランドの歴史と文化について、オーストラリア大使館参事がオーストラリアの教育と文化について、カナダ大使館一等書記官が多文化主義国家としてのカナダについて、それぞれ大変興味深い講演をして下さいました。このような催しは、参加した学

*Mio HATADA
1964年6月生
京都大学大学院文学研究科博士後期課程
単位取得退学（1993年）
現在、大阪大学　世界言語研究センター
准教授　文学修士　イギリス文学
TEL：072-730-5342
FAX：072-730-5342
E-mail：hatada@world-lang.osaka-u.ac.jp

生の英語力を高めると同時に、英語のバラエティを実際に体験し、また英語を母国語とする国々の多様な文化についても興味を持ってもらうきっかけとなる最適の機会であることは間違いなく、今後も可能な限りは続けてゆきたいと思っています。

英語と文化

英語という言語自体については今さら説明の必要は無いでしょうから、英語が、話されている地域や時代の文化的背景をいかに反映しているか、ということに触れておきます。私自身は、19 世紀の英文学が専門であるため、その時代の小説などをよく読むのですが、しばしば現れる馬車の種類の豊富さにはいつも感心させられています。chaise, coach, curricle, gig 等々、単語一つで「○頭立て○輪○人乗り馬車」を表してしまうのは、いかに馬車が当時の生活で重要な存在であったかを示しています。以下では、アイルランド出身で英語学が専門のO Dwyer先生にお伺いした、アイルランド英語に関する興味深い話を簡単に紹介します。

現在のアイルランド英語の発音と語彙には、アイルランド語と古い時代の英語の名残を見ることができ、特に南部のアイルランド英語に特徴的な文法・構文・イディオムには、アイルランド語の影響が強く現れています。ここで少し専門的になりますが、「不利益の与格（dative of disadvantage）」という文法的事象について取り上げます。これは“It is not a common sickness on him.”という文章の“on him”の部分のようなものを指します。O Dwyer 先生によるとこの表現は、悲しみ、狂気、怒りなどの肉体的・精神的状態は、悪霊、その他の外部の力によって人の上にもたらされる、というアニミズム的考え方に由来しているとのことです。（古いアイルランドの伝説では、ドルイド僧がそのような不思議な力を持った存在として登場しています。）「不利益の与格」は“MENTAL AND PHYSICAL STATES PLACED UPON A PERSON”を概念化した表現であり、根底にある概念そのものがもはや意識されなくなった現代においても形として残っている、ということです。

これは文化が言語に与える影響を示す一例にすぎず、世界各地で話されている英語は、その地域の文化やものの考え方によって nativization（土着化）が起こり、スタンダード英語とは異なるものになっていることもよくあります。身分の上下意識の強いインドでは“What can I do for you?”の代わりに“What is your command?”と言うことがあったり、兄弟間の上下意識が強いガーナでは“elder brother”よりは“senior brother”が使われたりするなど、言葉とそれを話す人びとの思考や文化は切っても切り離せない関係にあるのです。

私たち英語研究室のスタッフは、英語の語学力向上はもちろんのこと、その背景にまで関心を持ち、「プラスα」の部分を理解しようとする学生を育てて行きたいと願っています。最後に本文の簡単な要約を記します。

English Majors form the largest group of students within the School of Foreign Studies, and the English Faculty consists of seventeen members, including three native speakers of English. Our students inevitably have some knowledge of English when they come to us, and they tend to exhibit a fairly wide range of linguistic ability, so, in this respect, it is sometimes difficult to satisfy everybody's needs within the classroom. English faculty members, however, are always eager and willing to help students develop not only their English language skills, but also their interest in the cultural backgrounds of English-speaking areas. It is also our pleasure to offer them additional opportunities to experience the world of English directly through the “World English Forum,” in which native speakers from various countries are invited to give academic lectures. We aim at a balanced development of both language skills and insight into the variety of views and cultures that exist within the Anglophone world.